

2026 年度 特待入試

第 1 回

国 語

[注意事項]

- 1 問題は一から四までです。
- 2 時間は 50 分です。
- 3 下敷きおよび電算機つきの時計の使用を禁止します。
- 4 解答は、濃くはっきりと書くようにしてください。
- 5 開始の合図があるまで問題用紙を開かず、手を触れないでください。
- 6 試験中はよそ見をせず、きちんとした態度で行ってください。
- 7 何か物を落としたら、黙って手をあげてください。
- 8 他の受験生に迷惑となるような行為をしないでください。

一次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

いま、Aの時代だと思う。写真や動画が、かつてないほど手軽に撮れて発信できるので、「いや、Aよりも画像の時代でしょ」と思う人が多いかもしれない。確かに、仔猫の可愛さをわかってもらうためには、百のAを費やすより、一枚の写真や数秒の動画のほうが雄弁……ということはある。

1、①、コミュニケーションという点に関しては、時代の中で言葉の比重は増しているように思う。

2、生まれ育った村で一生を過ごすとしたら、

周囲の人とのやり取りは、A以外のものがたっぷり助けてくれるだろう。なんなら、笑顔をみせるだけで、こぶしを突き上げるだけで、いつもと違う服を着ただけで、あなたの気持ちを伝えられるかもしれない。ひと言つぶやいた「いやだ」という言葉の背景に、小さいころからの性質や日ごろの習慣や最近の体調なんかも加味して、理解してもらえるかもしれない。②小さなコミュニティでは、わかりあうための情報として、言葉は数あるものの一つに過ぎない。同じ言葉を発しても、「この人が言うんだから、よほどのことだ」から「また言ってるよ、しょうがないな」までグラデーション付きで伝わってゆく。

「村で一生」は極端な例だが、このような「個人の言葉の背景を理解してもらえる環境」ではないところで、多くのコミュニケーションをしていかねばならないのが現代社会だ。家族や友人、恋人同士などはこの限りではないけれど、行動範囲がグンと広がり、ネットでのやり取りが日常になっている今、背景抜き言葉をつかひこなす力は、非常に重要だ。それは、生きる力と言ってもいい。

村の道なら、すれ違いざまに肩が触れたとして、「あ、ごめん」と顔見知り同士が軽く会釈をすればすむ。それがネットでは、大事故になったりする。相手のバックグラウンドを知らないまま始まる言葉の応酬。そもそも前提としている常識が違えば、互いに「なんて非常識な!」ということになる。イメージとしては、違うルールで高速道路を走っているようなもの。

3 SNSの場合、事故で燃えている車があるという情報が広がると、消火活動よりも、何故かIを

注ぎに来る人が群がるという傾向がある。いわゆる炎上という現象だ。

便利で、やっかいな時代を、私たちは生きている。顔の見える関係が広がった先に、さらに顔の見えない関係が追加された。

「顔」といえば、思い出すエピソードがある。電車の中で「面と向かって電話した」と聞こえてきたのだ。そのときの驚きを拙著『言葉の虫めがね』に綴っているので、抜粋してみよう。1999年出版のエッセイ集なので、今から四半世紀前の観察記録である。

*

あるとき電車に乗っていたら、若い男の子が「オレ、そんなときは腹立って、面と向かって電話しちゃったよ」と言っていた。「ん?」と思って耳をダンプにする私。面と向かえないから、電話するのではないか? この子は「面と向かう」を間違っているのだろうか……。が、よくよく聞いてみると（失礼!）そうではなかった。話は、こうである。

その男の子は、日常的にパソコン通信をしているようで、近ごろ通信相手とかなりひどいトラブルがあった。ちょっとしたことから、電子メールで抗議するぐらいですませるのだが、あまりにⅡにきたので、そのときばかりは電話をかけて文句を言った——と。つまり、電話をかけて肉声で直接話すというのは、彼にとっては立派な「面と向かう」行為なのである。

私たちの日常において、電話というのはかなり「濃い」コミュニケーションの部類になってきているようだ。かつて電話が登場したときには「そんな、直接顔も見ずに、機械を通して話をするなんて、非人間的だ！」という意見があったそうだが（この話にはオチがついていて、電話を使って人々がまず何を話したかという、次に会う約束についてだった、とか）。

今や、電話が非人間的なものだなんて、誰も思わないだろう。急速に普及しはじめているファクシミリや留守番電話に比べると、肉声がリアルタイムで聞こえる電話というのは、かなり生々しいとさえ感じられる。

*

「耳をダンボにする」という死語はさておき、電話での会話が生々しいという感覚は、今ならより共感を得られるのではないだろうか。「急速に普及しはじめたファクシミリや留守番電話」は下火になり、昨今はメールが主流になった。同じエッセイで、ネットの言葉については以下のように書いている。

*

パソコン通信上で交わされている言葉を観察すると、書き言葉と話し言葉とが、限りなく近づいてきているなあと思うことがある。特に、リアルタイムのチャットといわれるおしゃべりなどがそうだ。「あ、〇〇さんがきた!」「もう、そろそろ寝よ」と「そうそう、このまえ話題になってた〇〇のことなんだけど」といった具合。言文一致の新しい局面、といったら大げさだろうか。

いっぽうで、お互いの意見やメッセージを書き込む掲示板のようなスタイルの場では、やわらかめの書き言葉が多い。そこに文章を書いている人は、文筆の仕事にしているわけではなく（なかには文筆業の人もいるが）ごく一般の人たちだ。そういった人たちが、これほどまでに頻繁に、しかもなかば公に向かって、ものを書くということをした時代が、かつてあっただろうか？ パソコンという道具を手に入れることによって、「ものを書く」という時間が、人々のあいだで急速に増えているように思う。そういう意味では、書き言葉としての日本語が、一部の人のものから多くの人のものへと開放されたとも言えるだろう。

もちろん、そのためにさまざまな問題もおこっている。ルールやマナーを無視した、人を傷つけたりする、無責任な書き込み。誰もが発言、発信できるといふ素晴らしさの陰には、誰もが発言、発信できるといふ恐ろしさがある。新聞の投書の場合には、採用か否かというふるいがかけられるが、パソコン通信の場合には、それが無い。明らかにひどいものを、事前にチェックする機能はあるものの、あとは個人の良識にまかされている。こういう便利で素晴らしい道具を

手に入れたことをきっかけに、普通の人が普通に使う書き言葉としての日本語の、足腰が鍛えられなくては、と思う。

*

書き言葉と話し言葉は、いっそう近づいてきている。ネットのメリットとデメリットについては、25年前も今もほとんど変わらないと感じる。そして「ルールやマナーを無視した、人を傷つけたりする、無責任な書き込み」が、社会の大きな問題に育ってしまった25年でもあった。

一番の違いは、ネットはもはや新しい場所ではなく、日常のものだということだろう。ここで取り上げているのはパソコン通信がメインだが、その後スマホが普及し、SNSが登場した。「書き言葉としての日本語が、一部の人のもの」という感覚は、今の若者にはほばないだろう。最後に記した「普通の人が普通に使う書き言葉としての日本語の、足腰を鍛える」ことが、よりいっそう重要になってきた。

俵万智『生きる言葉』より

※拙著……作者が自分の著書をへりくだって表現する言葉。

※言文一致……話し言葉に近い形で文章を書くこと。

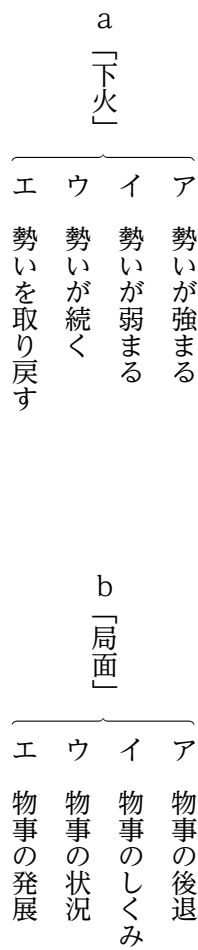
問一 — A にあてはまる語を、本文中より抜き出して答えなさい。

問二 — 1 3 に最も適する語を次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア さらに イ たとえば ウ けれど エ ほとんど

問三 — I ・ II には、漢字が一字入ります。あてはまる漢字をそれぞれ答え、慣用句を完成させなさい（なお、II には体に関する漢字が入ります）。

問四 — 部 a 「下火」、b 「局面」のここでの意味として最も適するものを次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。



問五 — 部①「コミュニケーション」ということに関しては、時代の中で言葉の比重は増しているように思う」とありますが、作者はなぜ、そのように考えているのですか、「から」に続くように本文中より六十字で探し、最初と最後の五字を答えなさい（句読点、記号も一字と数えます）。

問六 — 部②「小さなコミュニティ」の「コミュニティ」とは、「地元や地域にもとづく人々の集まり」という意味になりますが、「小さなコミュニティ」とほぼ同じ内容を表す部分を、これより前の部分から七字で抜き出して答えなさい。

問七 — 部③「彼にとっては立派な「面と向かう」行為なのである」とありますが、「面と向かう」となぜ「」がついているのでしょうか、その説明をしている次の文の空らんにあてはまる内容を答えなさい。

「面と向かう」とは、そもそも、① という行動であるが、普段、パソコン通信でのみやり取りしている若い男の子が抗議した相手に対して② という行動を、「面と向かう」であるとしている若い男の子の感覚が、とてもおもしろいと筆者が感じているから。

問八 — 部④「『普通の人が普通に使う書き言葉としての日本語の、足腰を鍛える』ことが、よりいっそう重要になってきた」とありますが、それはなぜだと考えられますか、その理由を答えなさい。

二次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。なお、原文ヨコ書きをタテ書きにしているので、数字のケタなどに注意して読むこと。

シュメールの60進法

われわれは今、10進法の世界に生きている。10、100、1,000、1,000、000とケタが上がる世界だ。それではなぜ基本単位の多く(1日の時間、1時間の分数、角度の度数など)が12、60、360といった6で割り切れる数に基づいているのだろうか。単に、過去の遺物なのか? それともそれ以上の意味があるのだろうか。

くさび形数字

くさび形数字による60進法(60を基数とした記数法)は、メソポタミアの古代シュメール文明で4、5,000年前に生まれた。彼らは数字を石、あるいは粘土板に記録した。

(中略)

なぜ60?

シュメール数字はローマ数字に少し似ているが、10進法でなく60進法に基づいている。それにしても、なぜ60なのか? ①数学者は長いあいだその理由について理論を組み立てようとしてきたが、決定的な答えはない。4世紀に、アレクサンドリアのテオンは、60が、1、2、3、4、5で割り切れる最も小さい数であり、約数の数が最大になるからではないかと指摘している。しかし、②約数の個数が問題なら、より適切な数はほかにもある。

一方、オーストリア系アメリカ人の科学史家オットー・ノイゲバウアーは、60進法はシュメールの③度量衡体系から生まれたと考えた。60は商品を3分の1、2分の1、4分の1、5分の1に簡単に分けられるからだ。しかし、④度量衡体系から数体系が生まれたのではなく、数体系から度量衡体系が生まれたと主張する人もいる。

鍵を握るのは夜空に浮かぶ星と考える人もいる。⑤当時は夜空が非常に澄んでいたし、夜にはあまりすることがなかった。シュメール人は夜空を熱心に観測し、星座を最初に命名した。星は彼らの暦だった。

星は毎晩少しずつ配置を変え、1年後に同じ場所に戻る。シュメール人は1年が365日であることを探り当てた。【ア】19世紀ドイツの数学者モリッツ・カントールは、この365を切り捨てた360が、60進法の起源であると結論づけた。【イ】360を6で割れば60だ。【ウ】④それはもっともらしく、1年が360日であれば都合のいいことに12か月は30日ずつに分けられる。【エ】なぜ円は現在360度なのかを説明することもできるかもしれない。

【オ】

おそらく、60進法は単に、指で数を数えるときの⑤彼らの独特の方法に由来するのだろう。記録によれば、メソポタミアの人々は、われわれとはかなりちがう方法で数えていたようだ。一方の手で、親指を使ってほかの4本の指それぞれの関節で分かれる3つの部分を数え、12まで進む。12それぞれに対して、もう一方

の手の親指を上に出し、つづいて4本の指を立て、12を5回数えて60になる。^⑥コツを覚えさえすれば、美しく単純で、非常に速い数え方だ。

起源がどうあれ、60が非常に多くの数で割り切れるおかげで、シュメール人は非常に高度な数学の手法を開発する基礎を築くことができた。2017年、デビッド・マンスフィールド率いるオーストラリアの数学者たちは、プリンプトン322と呼ばれるバビロニア粘土板の暗号を《⑦》解読したと発表した。この3,800年前の粘土板は、100年前に実在したインディ・ジョーンズことエドガー・J・バンクスによってイラクで発見された。その後、ニューヨークの出版業者ジョージ・プリンプトンに売却され、さらにコロンビア大学に遺贈された。

粘土板には、バビロニア様式のくさび形文字で複雑な図表が描かれている。マンスフィールドと彼の同僚によれば、これが初期の三角関数表で、現在使われているものよりも値が正確であるという。3で割り切れる60を基数としているため、3で割り切れない10を基数とした数より、正確な値を表せる場合があるからだ。 $1/2$ 、 $1/4$ 、 $1/5$ を10進法の小数で表すのは簡単で、それぞれ0.5、0.25、0.2となる。しかし $1/3$ は0.3333…で、無限小数になり、《⑧》を表せない。

マンスフィールドの主張が正しいかどうかはわからない。しかし、彼らはたしかに基数としての60の利点を示した。ある数を10で割ったり、ある数に10を掛けたりするときは数字の位置を変えるだけで済む。その便利さに、われわれは完全に慣れきっている。小数が計算の範囲を無限に広げたのだ。しかし時間を分割するなど実用的な場面では、60の可分性の高さ（たくさんで割り切れる性質）に利点がある。ほかの数体系が現れたり消えたりするなか、60進法が長期にわたって生き残った理由はここにある。1日を10時間とし、1時間を10分にすればよいと真に提案する人は（ほとんど）いない。《⑩》

アダム・ハート・デイヴィス著 緑慎也訳『フィボナッチの兎 偉大な発見でたどる数学の歴史（創元社刊）』より
© Elwin Street Productions
(Fibonacci's Rabbits And 49 Other Discoveries that Revolutionised Mathematics)

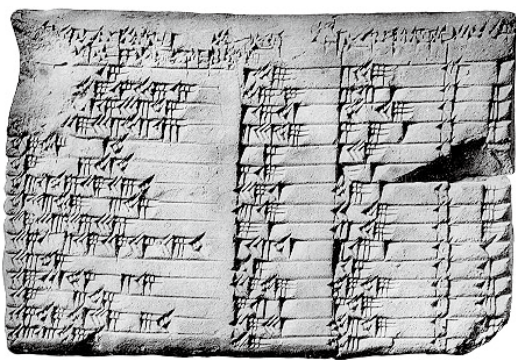
- * 基数……この場合は、数をあらわすもと（ひとケタの単位）になる数をさす。2進法では2、10進法では10。
- * 記数法……特定の数を表す数字を定めて、その組み合わせによって数を表す方法。
- * メソポタミア……世界最古の文明が発達したチグリス・ユーフラテス川流域の平野。おおよそ現在のイラク、シリア東部およびイラン南西部にあたる。

* 度量衡……長さや容積と重さ。また、それらをはかる道具である物差し・ます・はかり・秤。

* シュメール人……紀元前3000年紀にメソポタミアに多くの都市国家を建設し、高度な文明を築いた民族。

* インディ・ジョーンズ……全世界でヒットした映画シリーズ5作品の主人公で、世界的に有名な考古学者・冒険家の名前。正式名称はインディアナで、インディは愛称。

* 三角関数……直角三角形の3辺間に成立する比を、ひとつの角の関数と考えたもの。ふたつの変化する数XとYにおいて、Xの値が決まればYの値が定まる時、YをXの関数という。



プリンプトン322(コロンビア大学HPより)

問一 ―部①「数学者」とあるが、この文章に数学者として名前が出てくる人数を次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 一人 イ 二人 ウ 三人 エ 四人

問二 ―部②「約数の個数が問題なら、より適切な数はほかにもある」の説明として最も適するものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 基数で割り切れる数が多い方がよいのであれば、60よりも小さい数の方がより適切である。

イ 基数を割り切れる数が多い方がよいのであれば、60よりも大きい数の方がより適切である。

ウ 基数で割り切れる数が少ない方がよいのであれば、60よりも小さい数の方がより適切である。

エ 基数を割り切れる数が少ない方がよいのであれば、60よりも大きい数の方がより適切である。

問三 ―部③「度量衡体系から数体系が生まれたのではなく、数体系から度量衡体系が生まれた」と主張する人もいる」という記述について、ある人が次のような感想を持った。空らんに入る言葉をそれぞれ指定の字数（ひらがな）で答えなさい。

度量衡体系と数体系のどちらが先なのか分からないなんて、まるで「三字」が先か「四字」が先か」という言葉みたいだね。

問四 「ア」「オ」のどれかに、「しかしこの説は憶測にすぎない。」という一文が入る。最も適するものを選び、記号で答えなさい。

問五 ―部④「それ」の内容を説明しなさい。

問六 ―部⑤「彼ら」が指すものを本文から九字で抜き出しなさい。

問七 ―部⑥「コツを覚えさえすれば、美しく単純で、非常に速い数え方だ」とあるが、この方法を使って「右手は親指で中指のふたつ目の関節を指しており、左手は親指を立てている」場合、10進法で表すといくつになるか、左図を参考にして、算用数字（1、2、3……）で答えなさい。ただし、数え始めは右手の人差し指から始めて、小指で終わるものとする。



問八 《 ⑦ 》に入るのに最も適したものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア さすがに イ みごとに ウ いっせいに エ ついに

問九 《 ⑧ 》に入るのに最も適した四字の語を、本文から抜き出して答えなさい。

問十 — 部⑨「便利さ」の説明として最も適するものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア シュメール人の数の数え方の利点は、とても早くしかも正確にできるということ。

イ 時間を分けるなどの実用的な場面では、60進法の利点が生かせるということ。

ウ 10進法においては、10を掛ける・割る場合は位を変えるだけでよいということ。

エ 60進法は、約数が多くあるという利点のために、長く使われてきたということ。

問十一 《 ⑩ 》に入る内容を考え、「なぜなら」という書き出しに続くように答えなさい。

三 □部の漢字が、例文A～Eと同じ意味で用いられているものをア～エから選び、記号で答えなさい。

A 横綱に推挙する。

ア 彼の推測に過ぎない。

ウ おおよその距離を推定する。

イ 緑化運動を推進する。

エ 価格の推移に注意する。

B 衣装を身につける。

ア お祭りの装飾をする。

ウ 安全装置を備え付ける。

イ 必要な装備を点検する。

エ 仮装行列に参加する。

C 彼の意見に異存はない。

ア 大切な存在になりました。

ウ 私の一存では決められない。

イ 現存最古の物語。

エ 長く保存されたもの。

D 段階を追って説明する。

ア 空手の初段を取得する。

ウ 段々畑が一面に広がる。

イ 文章を段落に分ける。

エ 階段から転げ落ちる。

E 難関にチャレンジする。

ア これは難問だ。

ウ 非難を受ける。

イ 目立たないが難点がある。

エ それは災難だったね。

四 次の——部のカタカナを漢字に直しなさい。

- 1 あれこれとカクサクする。
- 2 ハイカツリョウを測定する。
- 3 王宮にサンジョウする。
- 4 相手のツゴウを聞く。
- 5 紅茶にサトウを入れる。

